

## 中学校武道授業の学習経験に関する検討（２）

— 大学生に対する回顧的調査から —

### Study on the Learning Experience of Junior High School Martial Arts classes（２）

— Retrospective Survey of University Students —

体育学部体育学科

平田 佳弘

HIRATA, Yoshihiro

Department of Physical Education

Faculty of Physical Education

岡山県立大学保健福祉学部

京林由季子

KYOBAYASHI, Yukiko

Department of Health and Welfare Science

Okayama Prefectural University

**要旨：**中学校における武道授業の学習経験について、大学生を対象に回顧法による質問紙調査を実施した。その結果、学習指導要領に示されている「簡易な攻防を展開すること」の学習経験が十分でない状況が明らかとなり、自己評価による学習成果の得点の低さに関連している可能性が示唆された。一方で、中学校以前の武道経験有群は武道経験無群よりも学習成果の得点が有意に高く、中学校以前の武道経験が武道授業における学習成果に一定の影響を及ぼしていることが示唆された。

**Abstract：** The Retrospective questionnaire survey was conducted with university students to examine their learning experiences in martial arts classes during junior high school. The results revealed that the learning experience related to “simplified offensive and defensive movements,” as outlined in the national curriculum guidelines, was insufficient. This insufficiency was suggested to be potentially associated with lower self-evaluated scores for learning outcomes. On the other hand, students with prior martial arts experience before junior high school demonstrated significantly higher learning outcome scores compared to those without such experience. This finding suggests that prior martial arts experience may have a certain influence on learning outcomes in martial arts classes during junior high school.

**キーワード：**中学校保健体育，武道授業，大学生，回顧的調査

**Keywords：** junior high school's health and physical education, martial arts classes, university student, Retrospective study

#### １．はじめに

日本の伝統文化の一つとして位置づけられる武道は、2008年に改訂された中学校学習指導要領（文部科学省、2008）により必修化となり、2012年度から中学校保健体育科において全面実施され10年以上が経過した。2017年には中学校学習指導要領（文部科学省、2017）が改訂され、武道の内容について、我が国固有の伝統と文化への理解をより踏まえるとともに、「技能」の内容が、以前の「基本となる技ができる」から「簡易な攻防を展開すること」に変更され、生徒一人一人に攻防する楽しさを味わわせることが強調された。

ところで、2012年の武道授業必修化以降、学習指導要領で示された内容の取り組みに向けて指導法や教材作成などの授業実践に関わる研修や実践、武道授業の実態や課題に関する研究などが蓄積されてきた（全日本剣道連盟、2009；平田・京林、2016；江原、2017；日本武道館、2021；林・石川・生田、2023）。しかし、これらの多くは武道種目をどう教えるかという観点からのものや、教員の視点からの授業評価・課題であるものが多い。これに対して、関・川田・中村（2023）は、武道必修化以降の武道授業における学習成果を検証することを目的として、中学校の武道授業において、学んだ生徒が学習内容に関して身に付いたと感じ

たことを学習成果と捉え、必修化前後の学習成果と授業条件の変化について検討している。具体的には、19歳から31歳までの対象者にweb調査を実施し、学習成果については、男性の技能を除いて必修化後の方が高い学習成果を示すこと、授業条件については、必修化後の方が授業の雰囲気は明るく、指導方法の工夫がなされ、運動時間の確保が進む変化が見られること、指導の段階は基本的技能の習得が中心となること、性別による違いがあることなどを明らかにしている。さらに、阿部・関・中村（2022）は、武道必修化前後に受講生が感じた学習成果の変化と授業条件の影響について、ゲーム的学習活動が学習成果に肯定的な影響を与えることを指摘している。また、瀧澤（2024）は、高校生を対象とした質問紙調査を実施し、武道授業に興味・関心をもっている生徒が多かったこと、限られた授業時間の中で武道の特性に触れる機会を十分に確保し、生徒の興味・関心をさらに引き出すためには、指導者の力量が重要であることを指摘している。

ところで、平田・京林（2024）は、中学校での武道授業を経験し、その後体育教員として武道授業を指導する立場に立つ保健体育科教員養成課程の学生が、自身の経験した武道授業の授業条件や学習成果をどのように捉えているかを明らかにすることを目的として、関・川田・中村（2023）を参考に回顧法による質問紙調査を実施した。その結果、関・川田・中村（2023）の結果と比較して、武道授業を通じて身についたと感じる学習成果をより肯定的に捉える傾向があることが示された。そこで本研究では、前報（平田・京林、2024）の成果を踏まえ、さらに幅広いデータの収集を目指して、保健体育科教員養成課程学生以外の一般大学生を対象に回顧法による質問紙調査を実施する。これにより、一般大学生が中学校での武道授業における学習経験をどのように認識しているかを明らかにすることを目的とする。

## 2. 方法

### 2.1 調査対象

I大学の2024年度教養科目「体育実技」受講生280名に依頼した。

### 2.2 調査方法

調査方法は、無記名のwebアンケートとした。調査用紙の冒頭に調査の目的および回答が個人の評価に関係しないことなどを説明した文章、回答の承諾・不承

諾の項目を載せるとともに口頭にて説明し、承諾の回答をもって調査及び情報の取扱いに同意が得られたものとした。その結果、回答を承諾するとした学生は107名であった。保健体育科教員養成課程学生2名を除く105名を分析対象とした。

## 2.3 調査内容

調査内容は①回答者属性、②授業条件：10項目、③学習成果：関・川田・中村（2023）の調査項目5カテゴリー17項目より構成した。学習成果の回答は4件法（思う4点～思わない1点）とし、カテゴリー平均得点と項目平均得点を算出した。統計的分析はSPSS28を用いた。

## 3. 結果

### 3.1 回答者属性

回答者の学年は1年生99.0%（104名）、2年生1.0%（1名）であり、性別は「男性」56.2%（59名）、「女性」42.8%（45名）、「その他」1.0%（1名）であった。また、中学校で受講した武道種目は、「柔道」57.1%（60名）、「剣道」25.7%（27名）、「その他」10.5%（11名）、「複数種目」6.7%（7名）であった。武道授業の実施形態は「男女別習」が60.0%（97名）、「男女共習」が40.0%（41名）であった。中学校の武道授業以前の武道経験は、「小学校や地域のスポーツクラブ、道場等の練習に参加していた」18.1%（19名）、「小学校や地域のスポーツイベントなどで簡単な体験をしたことがあった」4.8%（5名）、「中学校で初めて経験した」68.5%（72名）、「その他」8.6%（9名）であった。

### 3.2 授業条件

武道授業の授業条件について、回答者が生徒の立場から感じた回答結果をTable 1～7に示す。

回答者が経験した武道授業の施設・用具の状況は「最低限の施設・用具」が60.0%と最も多く、「十分な広さと用具」は34.3%であった。体を動かしている割合は「7割以上」が36.2%と最も多く、次いで「5割以上7割未満」が26.7%であった。授業の雰囲気は明るかったかは「ややそう思う」が48.6%と最も多く、ゲーム的要素を取り入れた学習活動は「行われていなかった」が51.4%と最も多かった。授業で行われていた工夫は「ペア学習やグループ学習」とする回答が60.0%と最も多く、次いで「指示・説明の視覚的提示」が38.1%であった。指導の段階は「基本となる技

まで」が70.5%と最も多く、「基本となる技を生かした、攻防を含む自由練習まで」とする回答は0.0%であった。

性別の男性群（59名）と女性群（45名）、武道経験が「小学校や地域のスポーツクラブ、道場等の練習に参加していた」および「小学校や地域のスポーツイベントなどで簡単な体験をしたことがあった」の武道経験有群（24名）と武道経験無群（72名）、武道種目の柔道授業群（60名）と剣道授業群（25名）の群間の比較を $\chi^2$ 乗検定により行った結果、授業条件のそれぞれの回答割合に有意差は認められなかった。

### 3.3 学習成果

学習成果の4カテゴリおよび18項目の平均得点をTable 8に示す。

全体の学習成果のカテゴリ平均得点は、「技能」2.4、「態度」3.0、「知識」2.8、「思考・判断」2.8、「体育の方向目標」2.8であった。カテゴリ間の比較を分散分析により行った結果、「技能」は他の4つのカテゴリよりも有意に得点が低く（ $p<0.05$ ）、「態度」は「知識」、「思考・判断」、「体育の方向目標」よりも有意に得点が高かった（ $p<0.05$ ）。性別、武道経験別、武道種目別のカテゴリ平均得点についてt検定による群間の比較を行った結果、性別の男性群と女性群では、「態度」の平均得点について女性群が有意に高かった（ $p<0.05$ ）。武道経験有群と武道経験無群では、「技能」の平均得点が武道経験有群の方が有意に高く（ $p<0.01$ ）、「思考・判断」「体育の方向目標」についても武道経験有群の方が有意に高かった（ $p<0.05$ ）。武道種目別では、柔道授業群と剣道授業群で有意差はみられなかった。

18項目の平均得点では、「態度」カテゴリの「健康・安全」の項目“⑤武道の授業では、体調の変化などに気を配ったり、危険な動作や禁じ技を用いたりしないなど安全に留意することができた。”が3.2と最も高く、「技能」カテゴリの「攻防の展開」の項目“②武道の授業では、「打つ・受ける（剣道）」「投げる・抑える（柔道）」など、相手との攻防を展開することができた。”が2.3点と最も低かった。性別、武道経験別、武道種目別の18項目の平均得点についてt検定を行った結果、性別の男性群と女性群では、「態度」カテゴリの「責任」の項目“④武道の授業では、授業において分担した役割を、積極的に取り組もうとすることができた。”および「健康・安全」の項目“⑤武道の授業では、体調の変化などに気を配つ

たり、危険な動作や禁じ技を用いたりしないなど安全

Table 1 授業の形態

体育教員1名	72.4
体育教員2名以上	12.4
体育教員と外部指導者	5.7
体育教員と支援員	7.6
分からない	2.0
合計	100(%)

Table 2 施設や用具の状況

十分とは言えない	5.7
最低限の施設・用具	60.0
十分な広さと用具	34.3
合計	100(%)

Table 3 体を動かしている割合

3割未満	11.4
3割以上5割未満	25.7
5割以上7割未満	26.7
7割以上	36.2
合計	100(%)

Table 4 雰囲気は明るかったか

そう思う	30.5
ややそう思う	48.6
あまりそう思わない	12.4
そう思わない	8.6
合計	100(%)

Table 5 ゲーム的要素を取り入れた活動

行われていた	3.8
やや行われていた	13.3
あまり行われていなかった	31.4
行われていなかった	51.4
合計	100(%)

Table 6 武道授業で行われていた工夫

指示・説明の視覚的提示	38.1
ICTの活用	7.6
ペア学習やグループ学習	60.0
部員などの師範や補助	26.7
わからない	18.1
複数回答(%)	

Table 7 武道授業の指導段階

		一般大学生 (平田・京林, 2024)	保健体育科教員養成 課程学生(平田・京 林, 2023) n=138
武道に関する説明や所作	度数	20	22
法まで	%	19.0	15.9
基本となる技まで	度数	74	84
	%	70.5	60.9
基本となる技を生かした、 攻防を含む自由練習	度数	0	24
まで	%	0.0	17.4
審判をつけた簡易な試合	度数	11	8
まで	%	10.5	5.9

\*\* $p<0.01$

Table 8 学習成果の平均得点

カテゴリー	項目	内容	全体 n=105		性別		武道経験		武道種目							
			平均値	SD	男性群(59名) 平均値	女性群(45名) SD	有り群(24名) 平均値	無し群(72名) SD	柔道授業群(60名) 平均値	剣道授業群(27名) SD						
技能	基本動作、基本となる技の習得 攻防の展開	①武道の授業では、相手の動きに応じた基本動作や基本となる技を習得することができた。 ②武道の授業では、「打つ・受ける（剣道）」「投げる・抑える（柔道）」など、相手との攻防を展開することができた。	2.5	0.81	2.5	0.81	2.6	0.80	3.0	0.61	2.4	0.79	2.5	0.77	2.4	0.74
			2.3	0.92	2.3	0.96	2.4	0.87	2.8	0.78	2.2	0.92	2.4	0.92	2.2	0.88
			平均	2.4	0.78	2.4	0.80	2.5	0.76	2.9	0.57	2.3	0.77	2.4	0.75	2.3
態度	協力	③武道の授業では、仲間の学習を援助しようとすることができた。	2.8	0.94	2.7	0.95	3.0	0.91	3.1	0.97	2.8	0.89	2.9	0.93	2.6	0.84
	責任	④武道の授業では、授業において分担した役割を、積極的に取り組もうとすることができた。	3.0	0.82	2.8	0.85	3.2	0.71	3.2	0.76	3.0	0.76	3.0	0.74	3.0	0.83
	健康・安全	⑤武道の授業では、体調の変化などに気を配ったり、危険な動作や禁じ技を用いたりしないなど安全に留意することができた。	3.2	0.83	3.1	0.90	3.5	0.68	3.4	0.81	3.3	0.76	3.3	0.77	3.2	0.75
	愛好的態度	⑥武道の授業では、授業に積極的に取り組もうとすることができた。	3.0	0.89	2.9	0.96	3.2	0.77	3.4	0.64	3.0	0.88	3.0	0.81	3.1	0.93
	伝統的な行動の仕方	⑦武道の授業では、相手を尊重し、伝統的な行動の仕方（礼儀作法など）を守ることに取り組もうとすることができた。	3.1	0.82	3.0	0.85	3.2	0.77	3.2	0.71	3.1	0.79	3.1	0.79	3.1	0.75
	平均	3.0	0.74	2.9	0.79	3.2	0.64	3.3	0.69	3.0	0.68	3.1	0.66	3.0	0.69	
知識	武道の特性	⑧武道の授業では、武道は、技を身に付けたり、身に付けた技で攻防する楽しさや喜びを味わうことができる運動種目であることを理解することができた。	2.9	0.88	2.8	0.89	3.0	0.85	3.2	0.82	2.8	0.85	2.9	0.82	2.9	0.87
	武道の成り立ち	⑨武道の授業では、武道は、武技、武術などから派生した我が国固有の文化として、世界各地に普及していることを理解することができた。	2.7	0.85	2.7	0.80	2.8	0.91	2.9	0.76	2.7	0.84	2.7	0.79	2.7	0.90
	技の名称や行い方	⑩武道の授業では、技には名称があり、身に付けるための技術的なポイントがあることを理解することができた。	2.8	0.82	2.7	0.88	3.0	0.71	3.0	0.65	2.8	0.83	2.8	0.78	2.8	0.80
	伝統的な考え方	⑪武道の授業では、単に試合の勝敗を目指すだけでなく、技の習得などを通して人間としての望ましい自己形成を重視するという考え方があることを理解することができた。	2.9	0.83	2.9	0.85	2.9	0.80	3.1	0.70	2.8	0.81	2.9	0.78	2.9	0.80
	その運動に関連して高まる体力 試合の行い方	⑫ 武道の授業では、各種目（柔道、剣道）において、高まる体力要素があることを理解することができた。 ⑬武道の授業では、簡易な試合におけるルール、審判や運営の仕方があることを理解することができた。	2.9	0.85	2.9	0.82	2.9	0.89	3.1	0.78	2.8	0.81	2.9	0.80	2.8	0.88
	平均	2.6	0.94	2.5	0.98	2.7	0.87	2.8	0.82	2.5	0.94	2.5	0.93	2.6	0.84	
	平均	2.8	0.70	2.8	0.72	2.9	0.65	3.0	0.59	2.8	0.65	2.8	0.61	2.8	0.67	
思考・判断	体の動かし方や運動の行い方に関する思考・判断	⑭武道の授業では、技を身に付けるための運動の行い方のポイントを見分けることができた。	2.7	0.84	2.7	0.89	2.8	0.77	3.1	0.60	2.7	0.84	2.7	0.81	2.8	0.80
	運動実践につながる思考・判断	⑮武道の授業では、仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた協力の仕方を見分けることができた。	2.9	0.85	2.8	0.88	3.1	0.76	3.1	0.78	2.9	0.80	2.9	0.80	2.9	0.85
	平均	2.8	0.76	2.7	0.81	3.0	0.67	3.1	0.65	2.8	0.72	2.8	0.68	2.8	0.77	
体育の方向目標	⑯武道の授業は楽しかったですか。 ⑰武道の授業を通じて、武道の特性を味わうことができましたか。		2.7	1.02	2.6	0.94	2.8	1.12	3.3	0.72	2.6	1.04	2.7	1.03	2.6	0.97
			2.8	0.85	2.8	0.86	2.9	0.82	3.1	0.78	2.8	0.82	2.8	0.78	2.8	0.89
		平均	2.8	0.87	2.7	0.82	2.8	0.92	3.2	0.70	2.7	0.85	2.8	0.83	2.7	0.81
全平均			2.8	0.65	2.7	0.67	2.87	0.60	3.1	0.55	2.7	0.59	2.8	0.58	2.7	0.57

（調査内容出典）関伸夫・川田裕次郎・中村充(2023)中学校武道授業の必修化前後における学習成果の変化.体育学研究,68, p.413. 但し、項目番号は筆者が加え、表の体裁を整えている。\*p<0.05

に留意することができた。”の2項目について、女性群の平均得点が男性群よりも有意に高かった（2項目とも $p<0.05$ ）。武道経験有群と武道経験無群では、「技能」カテゴリーの「基本動作、基本となる技の習得」の項目“①武道の授業では、相手の動きに応じた基本動作や基本となる技を習得することができた。”および「攻防の展開」の項目“②武道の授業では、「打つ・受ける（剣道）」「投げる・抑える（柔道）」など、相手との攻防を展開することができた。”、「愛好的態度」の項目“⑥武道の授業では、授業に積極的に取り組もうとすることができた。”、「思考・判断」のカテゴリーの「体の動かし方や運動の行い方に関する思考・判断」の項目“⑭武道の授業では、技を身に付けるための運動の行い方のポイントを見分けることができた。”、さらに「体育の方向目標」のカテゴリーの項目“⑯武道の授業は楽しかったですか。”の5項目について、武道経験有群の平均得点が武道経験無群よりも有意に高かった（①⑯項目は $p<0.01$ 、②⑥⑭項目は $p<0.05$ ）。武道種目別では、柔道授業群と剣道授業群で有意差はみられなかった。

### 3.4 前報との比較

授業条件について前報（平田・京林，2024）と $\chi^2$ 乗検定により比較した結果、本研究ではTable 7に示す通り、武道授業の指導段階について「攻防を含む自

由練習まで」とする回答が有意に低かった（ $p<0.01$ ）。また、学習成果のカテゴリー平均得点についてt検定により比較した結果（Table 9）、全てのカテゴリーにおける平均得点が前報の結果よりも有意に低かった（ $p<0.01$ ）。

Table 9 学習成果のカテゴリー平均得点—前報との比較—

	一般大学生 （平田・京林，2024） n=105	保健体育科教員養成課 （平田・京林，2023） n=138	
技能	2.4	2.9	**
態度	3.0	3.3	**
知識	2.8	3.1	**
思考・判断	2.8	3.1	**
方向目標	2.8	3.1	**

### 4. 考察

本研究では、保健体育科教員養成課程の学生を除く一般の大学生を対象に、自身が経験した武道授業の授業条件や学習成果をどのように捉えているかを明らかにするために、回顧法による質問紙調査を実施した。なお、本研究は回顧法による調査方法のため、回答者には数年前を振り返っての回答を求めている。また、学んだ生徒の側からの回答のため自己評価による学習成果が客観的に習得されたかの確認はできない。そのため、記憶の曖昧さや不確かさが生じる可能性がある



ことを念頭に置き考察する必要がある。

まず、本研究における対象者が経験した武道授業の授業条件は、男女別習で体育教員1名によって行われている授業形態が多かった。また、施設や設備が十分に整っているとする回答は半数以下に留まり、これらの結果は先行研究（京林・平田，2024；関・川田・中村，2023）の報告と概ね一致していた。武道授業の実施体制や施設・用具の整備状況については、武道授業必修化以降、一定の改善が進められてきたものの、なお十分な実施体制の確立や施設・用具の整備に向けた取り組みが困難である中学校の現状が示唆される。

授業内容に関しては、指導の段階について「基本となる技まで」とする回答が全体の約7割を占めるとともに、「ゲーム的要素を取り入れた学習活動があった」とする回答も全体の2割未満に留まり、多様な学習活動の展開に課題があることが示唆された。しかしながら、授業全体の雰囲気は比較的良好であることが示された。指導の段階に関して本研究では「攻防を含む自由練習まで」とする回答が前報（平田・京林，2024）より有意に低い結果となったが、前報は保健体育科教員養成課程に在籍する大学生を対象としており、運動への興味関心が高く、身体能力も優れた学生が多かったことから、武道授業時においてモデルや補助を担うなど、授業への積極的な関与が影響していることが考えられるほか、大学における学習の影響を受けている可能性も示唆される。しかしながら、一般の大学生を対象とする本研究において、学習指導要領に示されている「簡易な攻防を展開すること」が、武道授業を経験した学生の立場から十分に認識されていない現状は、指導内容の深化に関する課題が依然として存在していることを示していると言える。

次に、中学校武道授業における学習内容に関して、回答者が身に付いたと感じた学習成果については、「健康・安全」や「愛好的態度」の項目を含む「態度」カテゴリの平均得点が最も高く、「攻防の展開」の項目を含む「技能」カテゴリの平均得点が最も低い傾向が確認された。また、全てのカテゴリにおける平均得点が前報（平田・京林，2024）の結果よりも有意に低かった。本研究の回答者には、学習指導要領に示される指導段階である「簡易な攻防を展開すること」の学習経験が十分でない者が多く含まれる点が影響していると考えられる。また、保健体育科教員養成課程の学生に比べて身体能力が高くない大学生や運動が苦手な大学生も対象に含まれていることが「技能」カテゴリの自己評価の低さに関連している可能性

も考えられる。一方で、武道経験有群が「技能」「思考・判断」「方向目標」の各カテゴリにおいて武道経験無群よりも有意に高い平均得点を示した。このことは、中学校以前の武道経験が武道授業における学習成果に一定の影響を及ぼしていることを示唆している。奥儀・久保田・石川他（2022）が指摘するように、小学校段階からの武道遊びや武道の動きを体験できる教材の開発について検討することは、武道授業における学習成果の向上に向けた重要な課題であると考えられる。

武道授業において特に重視されるべき点として、武道必修化の背景にある、武道が武技や武術などから発展した日本固有の文化であることを理解させること、さらに、武道の本質的な課題とその魅力を生徒に伝えることが挙げられる。学習指導要領（文部科学省，2017）においても、1対1の対人状況下で相手の動きに応じた基本動作や基本技を習得し、それらを用いて相手を攻撃・防御する過程で勝敗を競い合い、互いに高め合う楽しさや喜びを味わう運動であることが明示されている。例えば、剣道では防具を装着し、相手を「打つ」または「打たせない」という攻防の駆け引きを楽しみながら取り組み、技術を試し合う経験をどのように授業に組み込むかが本質的な課題となる。しかしながら、現在の武道授業では、礼法や伝統的な行動規範（礼儀・礼節）および安全管理の指導が優先される傾向が強く、武道の本質的な魅力を伝える授業設計についての検討は少ない現状にあることが本研究からも示唆される。学習指導要領で示されている「簡易な攻防」や「攻防」の魅力を生徒に実感させる武道授業の構築に向けた検討が重要と考えられる。

今後は、各武道種目が持つ対人格闘技としての特性や魅力を捉えた保健体育科教員養成を目指し、武道授業の学習成果に影響を与える授業条件や内容について、幅広くデータを収集し検討していく必要があるだろう。

## 付記

本研究は、2024年9月に開催された日本武道学会第57回大会において研究発表した内容に大幅に加筆修正したものである。

## 引用・参考文献

- 1) 阿部剣征・関伸夫・中村充（2022）武道必修化による剣道授業における学習成果の変化. 武道学研究 55, 14.

- 2) 江原孝史 (2017) 中学校武道必修化の問題と課題, 特に剣道に焦点をあてて. 教育総合研究 1, 209-221.
- 3) 加藤優 (2017) 『高田4 原則』を実現する授業方策の一考察. 都留文科大学研究紀要 86, 1-19.
- 4) 林弘典・石川美久・生田秀和 (2023) 学習指導要領の改訂に向けた中学校・高校における柔道授業の検討. びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要 20, 19-26.
- 5) 平田佳弘・京林由季子 (2016) 中学校保健体育教員の武道授業実践に関する意識－岡山県における実態調査から－. 武道学研究 49, S\_119.
- 6) 平田佳弘・京林由季子 (2024) 中学校武道授業の学習経験に関する検討－保健体育科教員養成課程学生に対する回顧的調査から－. 環太平洋大学研究紀要 24, 7-15.
- 7) 文部科学省 (2008) 中学校学習指導要領 (平成17年告示) 解説 保健体育編.
- 8) 文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 保健体育編.
- 9) 日本武道館 (2021) 第6回アンケート調査結果について. 月刊「武道」2021年12月号, 148-167.
- 10) 関仲夫・川田裕次郎・中村充 (2023) 中学校武道授業の必修化前後における学習成果の変化. 体育学研究 68, 409-423.
- 11) 瀧澤政彦 (2024) 高等学校における柔道競技者減少に関する一考察: 中学校武道必修化がもたらしたものは. 東京学芸大学附属高等学校研究紀要 61, 57-64.
- 12) 與儀幸朝・久保田浩史・石川美久 他 (2022) 小学校中学年を対象とした柔道遊びの教材開発. 武道学研究 55, 76.
- 13) 全日本剣道連盟 (2009) 学校体育実技「武道」指導資料 中学校武道の必修化を踏まえた剣道授業の展開. 全日本剣道連盟.